

# スクールカウンセラー・キャンディデイト の研修に関する一考察 －西九州大学大学院における卒業後教育－

柏村 雪子<sup>1</sup>, 安部 順子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>福岡県スクールカウンセラー, <sup>2</sup>西九州大学)

(平成16年12月2日受理)

A Consideration about Training of a School Counselor Candidate  
－Education after Completion of the Nishikyushu University Graduate School－

Yukiko KASIWAMURA<sup>1</sup>, Junko ABE<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>School Counselor of Fukuoka Prefecture, <sup>2</sup>Graduate School of Health and Welfare  
Science, Nishikyushu University)

(Accepted December 2, 2004)

## Abstract

This paper reported experience as a school counselor in a junior high school. One of the authors who are beginners as a school counselor arrived in her new post, and showed how the identity as a school counselor was gained in six months. And it suggested that the education after completion of the Nishikyushu University graduate school which trains clinical psychologists was useful to her the following point, [1] She was able to reveal the uneasiness of mental clinical experience. [2] She was supported. [3] She was able to clarify the problem in school counseling.

**Key words** : After graduation education 卒業後教育  
Cultivation of clinical psychologists 臨床心理士の養成  
Supervision スーパービジョン  
Case report 事例報告  
School counselor スクール・カウンセラー

## 問題

学校臨床においては、スクールカウンセラーの需要が高まるにつれ、ベテランの臨床心理士だけでは、その供給がおいつかない現状がある。もちろん、スクールカウンセラーの業務は臨床心理士だけが担っているわけではないが、臨床心理士や臨床心理士をめざすものにとっては、スクールカウンセリングは重要な職域のひとつといえる。

臨床心理士を養成する指定大学院である西九州大学大学院においても、平成16年3月に学校臨床に関わる修了生（臨床心理コース第1期生）を出し、その卒業後教育において、スクールカウンセラーとしての力量を向上させるためのスーパービジョンを実施している。

全国的に、初心のスクールカウンセラーやそのキャンディデイトは続々と排出されて、初心者研修の必要性がいよいよ増してきた。学校臨床に関する、全国レベル、あるいは地区や県単位の臨床心理士会主催の研修会やセルフ・ヘルプの研究会等、スクールカウンセラーに関する実践や知恵を共有する機会も多い。いかにして学校にとけこむのか、学校では何をしたらいいのか、スクールカウンセラーのあり方などについて、多くのことがベテランの臨床心理士よって示唆されている。（村山，1995；黒沢，2000；徳田2000；田嶋，2001，伊東，2003等）

ところで、これらの示唆は実際の現場で初心のスクールカウンセラーにどのように理解され、実践されているのだろうか。言い換えるならば、認知的な理解と体験とはどのように一致してくるのだろうか。これらについて体験をふりかえることは、スクールカウンセラーとしての力量を向上させるためには非常に有用であると思われる。

そこで本論では、①筆者のひとりで、西九州大学大学院臨床心理コース第1期生であり、現在「準スクールカウンセラー」（臨床心理士の資格はまだ持たないが、臨床心理士養成指定大学院を修了する等、一定の条件を通過している者）として勤務している、Aカウンセラーの体験をひとつの事例として提示し、スクールカウンセラーとしての変化（成長）のプロセスを明確化したい。その上で、②西九州大学大学院臨床心理コースの卒業後教育の意義について、検討していく。

## 事例

### 1. スクールカウンセラーの居場所を求めて

－広報活動から始める－

スクールカウンセラー（School Counselor 以下SCと記す）として中学校に勤務をし始めた頃は、何をしたいのか、どこまで動いていいのか分からず職員室に居ても相談室にいても居心地が悪く、学

校の雰囲気に慣れることで精一杯だった。また、面接や生徒の来談なども少なく、教育相談担当や養護教諭の時間が空いているときに情報収集をしたり、挨拶運動などに参加をしたが時間を持って余すことが多かった。そのため、自分が中学校にいる意味が見出せず、時間を持って余すことがつらく勤務日になると気が重くなり、一日という時間をとても長く感じた。そのような状況を少しでも変えようと掃除時間や休憩時間に学校内を歩き生徒達と接するよう心掛けたが、生徒の反応一つ一つに一喜一憂してしまい、自分にとっては苦痛を感じることもあった。その他に、SCという役割や自分のことを少しでも知ってもらおうと、広報活動の一つとして新聞を作成するが、どこまで書いていいのか分からないため、教職員に相談をするが人により意見が異なることもあり模索の日々が続いた。そのため常に不安を感じていた。

勤務するたびに不安を感じてしまう自分に対して、自分はSCとして向いてないのではないかと、自分以外のSCが学校に配属されていれば学校にとってもいいのではないかと、など自分を責める時が幾度となくあった。

### <スーパービジョンを受けて>

そのような状況をスーパーヴァイザー（Supervisor以下SVと記す）に相談したところ、広報活動として新聞作りの助言や部屋の空間作りに目を向けることなどを助言していただいた。また、面接や相談だけにとらわれず中学校にSCがいるということをも重要視し、いつでも動けるように時間が空いている間に準備段階をしておくよう言われた。

スーパービジョン(Supervision)を受けたあとは、気持ちが軽くなったが、実際に勤務をすると職員室にいる居心地の悪さや空いている時間の使い方などを有意義に過ごすことが難しかった。また、SCが中学校にいるということをも重要視することでそれを逃げ道のようにしてしまう自分がいるようで疑問と不安が常にあった。しかし、時間が経つにつれ自分が今出来ることをしようという思いが芽生えた。それと同時に、中学校で自分の評価を気にしているあまりに面接や生徒の来談にこだわっていたことに気づき、少しずつ自分の気持ちと向き合いはじめることができた。自分の気持ちに気付くことで、SVが何を意図してしたのかをもう一度考えるようになり、面接の振り返りをしたり、部屋の空間作りをしたりと自分に出来ることに目を向けていけるようになった。

しかし、職員室にいる居心地の悪さや自分の広報活動の要領の悪さなどは、まだ課題が山積みのような

に感じる。そして、学校には同じ職種がないことからその良さと悪さが分かり始め、つい自分を甘やかしてしまったり、苦手なことから逃げてしまうことに対して自責の念にかられることがある。

## 2. 児童生徒への間接的な支援活動

### －初めての保護者面接－

SCとして初めて保護者面接をおこなった時、緊張だけでなく保護者から質問や回答を求められることに対して困惑した。生徒が不登校になることについて、きっかけは予想がつくかもしれないが、原因は簡単には分からない。しかし、保護者や生徒の周りの大人は原因を追究しようとし、どうすれば登校するようになるのかと回答を求めてくる。SCが接したことや話したことも無い生徒のことを保護者や教職員の話を聞いただけで判断するのは難しく、自分の回答を待っている保護者や教職員にどう説明をしているのか考えさせられることがあった。また、自分の言葉や仕草などで人が左右されてしまうかもしれないと思うと、ますます言葉が出てこなかった。さらに自分だけでは抱えきれないことを相談されたとき、あまりにも自分の心には重く、どう気持ちの処理をしていいのか分からない時も度々あった。

一方で、中学校へSCとして勤務に行けば、保護者や生徒は経験の量に関係なく相談してくる。そのような状況で、自分なりに判断し対応していくことに不安や心配が常にあった。

### <スーパーヴィジョンを受けて>

そのような状況や相談内容、自分の対応をSVに常に報告し、その都度指導していただいた。スーパーヴィジョンを受けることで気持ちが軽くなり、フィードバックをすることが出来る反面、疑問や不安などを感じることもあった。

保護者面接をし始めた頃に比べると緊張は軽減したが、回数を重ねても不安や緊張などは常にある。今、振り返ると、中学校に勤務し始めた頃は、若いということや経験が少ないということを教職員から言われることもあり、変えることの出来ない事実に対して不満や焦りが強かった。そのため、自分で気が付かない内に評価や反応を気にしてしまい余裕がなくなり、過度に緊張をしていたように思う。その緊張から相手の話だけに集中することが難しくなり、自分自身が回答を探したり、教職員の言葉に左右されてしまっていたように感じる。さらに、そのような余裕のなさから思うように説明が出来ないことや自分の思いを上手く伝えられないもどかしさが緊張や焦りを増長していたように思う。

今思えば、教職員や保護者とは違う立場だからこそ言える意見や考え方があるにもかかわらず、当時は組織の中で自分だけが違う考え方を持つことに不安があった。そのため、スーパーヴィジョンを受けていると安心し、勤務に行くと不安になるということが繰り返し起こっていた。

自分の気持ちに気付いたことで、以前よりはこのような思いは軽減したが、まだどこかで評価を気にしている自分がいることを感じるときがある。

## 3. 児童生徒への直接的な支援活動

### －初めての不登校生徒への関わり－

SCとして初めて不登校生徒に関わったときは、緊張もあったが生徒と関われることへのやりがいや自分がどう関わっていけるのかという思いもあった。そのため、保護者や教職員と接するよりも自然な自分で接することが出来た。だが、学校という一つの組織の中で生徒と接することは、生徒一人だけを対象とするのではなく保護者・家族、教職員・学校、地域など様々なものが密に関係していることを改めて感じた。生徒とSCとの間で交わした約束もお互いの中では了解を得ていても、教職員や保護者になかなか理解を得ることが出来ないこともあった。また、初めて関わる生徒に対してコミュニケーションを深めることやSCが保護者や教職員と違う役割を持っているということを生徒に感じて欲しいという思いから、初期面接に時間をかけた。しかし、このようなSCの支援に対して生徒を甘やかしている、遊んでいるなどという教職員の反応に動揺と疑問を隠し切れなかった。さらに、勤務する度に状況や生徒の悩みは常に変化しており、対応もその都度変えていかなければいけない。それゆえ自分の心の中を整理出来ないまま次の面接へと行くこともあり、それをどう処理していけばいいのか分からず精神的に疲れることがあった。

このように、学校内に固定した帰属集団をもたなかった筆者は、教師・保護者等に対して、学校システムのなかでSCの果たせる機能と役割について模索するようになってきた。

### <スーパーヴィジョンを受けて>

SVには、自分の生徒への関わり方、対応の仕方を報告し指導を受けた。学校という枠の中では詳しく説明しないとなかなか理解を得ることが出来ないことでも、当たり前のように理解してもらえることは心強く、自分の対応も素直にフィードバックすることが出来た。

生徒と関わり始めた頃は、生徒、保護者・家族、

教職員・学校というものがそれぞれ点と点の関係であった。そのため、教職員や保護者への説明や対応が不十分になっていたように感じる。生徒、保護者・家族、教職員・学校という枠に対してつながりをもって対応をしているつもりだったが、十分ではなかった。しかし、学校の中で対応をしていくということは、それらを線でつなげ対応していかなければいけない。また、学校は大学の相談室とは違い急遽面接が入ったり、相談者が必ずしも一人ではないためその都度構造化をしていかなければいけないことを日経つにつれ感じるようになった。最初はその枠組みが自分の中できちんと出来ておらず、曖昧だった。しかし、少しずつではあるが枠組みを自分の中で作り対応していけるようになり、不安が軽減されたように思う。

一方で、スーパーヴィジョンを受けて自分なりに感じた生徒の雰囲気や周りで起こっている状況、環境などを、自分の物差しだけで話すことに疑問を感じることもある。また、勤務するたびに状況や生徒の悩みなどは常に変化しており、スーパーヴィジョンを活かしきれないことやその都度感じる不安や疑問を自分の中で整理するにはまだ時間がかかるように思う。

#### 4. 連携活動

週一回という勤務のため、その週に起こった出来事や気なる生徒の情報は、勤務する度に担任や教育相談担当、養護教諭から情報を得るようにしている。そして、一方で保護者や生徒の面接や家庭訪問をおこなった後は、守秘義務を守りながら保護者、生徒、学校のコンサルテーションを心がけ情報交換を行っている。しかし、SCが働きかけても教職員の時間が空いていないことがあり思うように情報が得られないことや、上手く伝えきれないことがある。そのため、接する人の数だけ柔軟に対応を変えていかなければいけないことを感じさせられる。また、守秘義務の範囲を定めることも難しく、守秘義務を守るあまりに教職員に上手く伝わらなかつたり、SCが何かを隠しているのではないかと詮索されることもある。そして、筆者自身も教職員をどこまで信じて良いのかという不安もあった。生徒から秘密ということで相談を受けても学校という一つの組織の中で隠しておいてはいけないことの場合、教職員に集団守秘義務のもとで話をし、実際にそのことを教職員が守り、生徒との関係が壊れることがないのかという心配がいつも頭をよぎる。さらに保護者と教職員の意見が食い違い、お互いがSCに対して要望や思いを伝えられることもあり、どのように調整してい

けばいいのか迷うこともあった。

#### <スーパーヴィジョンを受けて>

連携活動のことをSVに相談したところ、大学でおこなっているカンファレンスで発表し助言をもらうことを勧められた。

カンファレンスでは、事例を通して自分の対応や悩みをあげていった。院生の頃からカンファレンスに参加し、何度か発表をしていることもあり、安心できる場ではあった。しかし、SCになって初めての発表では、自信のなさや羞恥心、防衛などがあり思うように発言出来ず、一つの言葉に対して深く考え込んでしまい自分を責める気持ちの方が強かった。2度目のカンファレンスでは、自分なりに前回のことを踏まえ、自分の気持ちを明確化し参加した。そのことで冷静に質問や助言を聞き、様々なことを学ぶことが出来た。

カンファレンスでは連携活動のことを主に挙げたところ、今まではその場で対応するだけで精一杯だったことに気づき、次のステップとしてどのように対応していけばいいのかということ学んだ。特に今まで学校での職員会議では、SCの参加は自由ということから自分とはあまり関係のないことというふうに印象を受けていたが、職員会議で出される生徒の話題や学校の風潮を把握することは重要であり、自分がどこに所属しているかを確認し、その所属によって学校全体のことを把握できる場を確保する必要があることを改めて感じた。また、学校では、心理臨床の視点が定着しておらず、自分なりに個を尊重し関係性を深めてることを基本として、生徒や保護者の見立てをきちんと定め対応していくことが教職員への対応につながっていくことを学んだ。それと同時に様々な質問から自分がどの部分を見落としていたのかということも明確になり、改めて自分自身にフィードバックをすることが出来た。

カンファレンスでは、SCとして自分が行ってきたことを否定されるのではなく、今からどう進めばいいのかという道しるべを提示してもらえたように感じる。カンファレンスで得た助言を全て自分のものには出来ないが、そのような経験をすることで、学校で自分がどのように動いていけばいいのか、どの部分が足りなかったのかということディスカッションしているうちに自然と気付け、SCとして働く意欲をもらったように思う。

#### 5. 教師や保護者の支援力を高めるための活動

教職員や保護者に対して活動といえるものは、まだ出来てないように思う。勤務をし始めて、SCと

してどのように働くのかということだけで日々追われているように感じる。その中で自分なりにしていることは、生徒や保護者と関わったときにどのように関わったのか、どのように生徒や保護者のことを感じたのか、生徒にはどのような理由で支援が必要なのかということ伝えるようにしている。また、教職員や保護者から関係機関などのことに対して質問を受けた場合、その場で対応出来なければ調べて後日説明するようにしている。

一方で校内研修などを行い心理という側面から説明をしたり、ストレスマネジメントやコラージュ療法等を実際に体験してもらうなどの活動を行っている。

## 考察

### 1. スクールカウンセラーとしてのアイデンティティの模索

#### (1) 最初の壁

一教職員とスクールカウンセラーの価値観の違いー生徒や保護者と接する機会が増えると同時に教職員と連携を図る機会が増えてくる。そのような状況の中で、最初は教職員との関係作りに戸惑った。なぜなら今まで自分が学んできた環境の中では当たり前のように受け入れられていた事や考え方が支持されないことが多々あったからだ。そのため、自分の考え方や対応の仕方は間違っているのではないかなどという不安を感じ始めた。そのことはスーパーヴィジョンを受けるときにも影響した。スーパーヴィジョンを受けるときは生徒のことだけでなく、周りの状況や環境なども話すが、一度自分の中で整理したことを口に出すため結局は自分の価値観の中でしか話が出来ていないのではないだろうかという思いへと至った。

今振り返ると、学校では自分だけが違う職種のため自分の意見や考え方が支持されにくいことがあり、そのことで不安を感じたり落ち込んだり、時には孤独感に押しつぶされそうになっていたように感じる。そのため、自分でも気が付かない内に"傷つきたくない"という防衛が働き、自分の都合の良いようにしか話をしていないように感じていたように思う。今は、生徒や保護者への対応で教職員とSCの目指すところは一緒であっても、その過程は異なり、その違いこそがSCの武器であると思うことが出来始めた。しかし、初めの頃は教職員の価値観と自分との価値観が違うことに戸惑い、自分の考え方が間違っているように感じ孤独感をつのらせ、そのような思いへと繋がっていったように感じる。

現在でも、スーパーヴィジョンを受け終えた後、自分の価値観でしか話しが出来ていないのではないだろうかと不安に思うことが時々ある。しかし、その一方でスーパーヴィジョンを受けることで安心を感じ心の中の葛藤は軽減される。このような思いに今後どのように対応していくのかは課題のように思う。(図1)

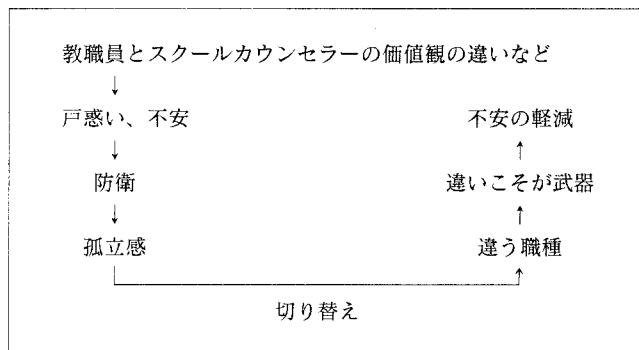


図1 心の切り替え

#### (2) 仲間との出会い

ースクールカウンセラー研修会の体験ー

ところでA市では月に一回、定期的にSCの研修会が行われている。月によって研修会の内容は異なるが、A市では主に少人数のグループに分かれ、現状や悩み、対応の仕方などを自由に発言出来るようになってきている。

初めの頃は、戸惑いや自信のなさからどこまで話して良いのかという不安や話して嫌な思いをするのではないかと防衛があった。また、他の人の話を聞く度に、自分だけが対応できていないという焦燥感や羞恥心もあった。そのため、最初の頃は参加するたびに落ち込み、研修会で何かを学ぶという余裕さえもなく、自分の現状を言うだけで精一杯になり、人の話に対し助言や自分なりの対応の仕方などを話すことも出来なかった。しかし、会に参加するにつれ、自分だけでなく他の人もなんらかの悩みや憤りを持っていたり、持っていた経験があることに気づき始め、自分だけではないということを知り安心したと同時に心強く感じた。それと同時に、自分の体験をもとに様々な助言や対応、他の人の悩みなどを聞くことで勇気や自分もまだ頑張れるという意欲を得ることが出来始めた。また、自分では思いもつかない考え方や対応の仕方などを聞くことで自分にはどのような部分が足りなく、そのためにはどうすれば良いのかなど、他の人の話を聞きながらヒントを得たり、自分の行動や対応と照らし合わせる事が出来た。次第に少しずつ自分の気持ちに余裕が出来始め、不安や緊張も軽減されるにつれ、自分のこ

とだけ話すのではなく、他の人の話に対してイメージしながら話を聞けるようになり、ディスカッションにも参加できるようになっていった。

研修会に参加して、経験不足や自信のなさから不安に感じたり時には落ち込んだりもするが、同じ職種という仲間がいること、実際の体験をもとにその場で話し合えることはとても心強く、自分の視野を広げられる場のように感じる。(図2)

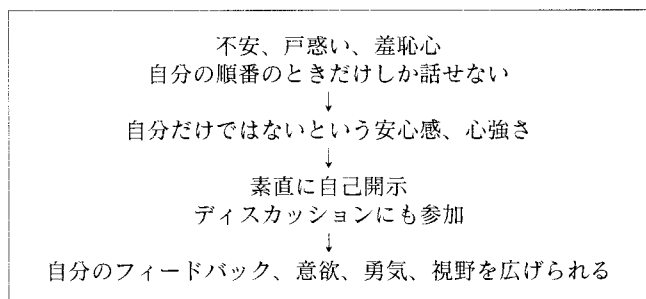


図2 研修会での心の変化

### (3) スクールカウンセラーとしての半年の軌跡

SCとして学校に勤務し始めた頃は、全てが不安と緊張の連続だった。学校という一つの組織に入ったものの今まで自分が居た環境とは違う空間にいることは居場所がないように感じられ居心地が悪かった。

時間が経つにつれ学校の雰囲気には慣れたしたが、慣れる頃に精一杯だった時期とは違う不安が出てきた。その不安とは学校に自分というSCがいる意味を見出せないことから起こってきていた。その頃は面接などの相談も少なく時間を持って余すことが多かった。そのため、自分がこの場所に居ていいのか、自分ではなく他のSCならばもっと効率よくしており学校にとってもいいのではないかと自分を責める事も多々あった。

面接などが少しずつ増えていくと、学校にいる居心地の悪さは軽減されていった。しかし、同時に面

接のことなどで教職員と連携を持つ機会が増えだし孤独感を感じ始めた。その原因の一つとして今まで自分が学んできた環境では当たり前のように受け入れられていたことが学校という場では当たり前ではないということを感じたことである。数人对SCの場合、SCの考え方や対応の仕方を伝えてもSCの言葉よりも教職員同士の言葉が支持されやすいことを何度か経験した。そのことで最初は孤独を感じていたが、時間が経つにつれ疑問へと変わっていった。その要因として面接が継続して入るようになったことがあげられる。面接が少なかったころは、自分の対応の仕方でいいのかという不安が常にあった。その不安は現在でもあるが、面接が継続することでその不安は軽減していった。そのため、自分の対応に対して教職員から“学校という場だから仕方ない”という言葉でまとめられることに疑問を感じ始めた。そのような行き場の無い気持ちを抱えながら夏休みへととなった。夏休みは、学校という場と距離がおけ時間をかけて自分と向き合えた時間であった。その時間のおかげで無くしていた気持ちの余裕や今までの自分を素直にフィードバックすることが出来、9月に向けての心の準備が出来た。学校が始まり出し、孤独感を感じることはあったが自分がSCとしてどのように動き働きかける必要があるのか、理解してもらうために何が欠けていたのかなど学校という環境を考えながら対応していけるようになっていった。そのような視点を広げることで、上手くいかないことがあってもその原因を整理し、どうすれば良かったのかなど次へのステップを自然と探すようになっていった。

現在でも不安に感じたり、落ち込んだりすることは多々ある。しかし、以前のようにその時点で止まらずに次へと結びつけ、自分の気持ちと向き合うことが少しずつではあるが出来るようになっていっているように感じる。

表1 スクールカウンセラーとしての心の変化

時間の流れ	気持ちの変化
4月	一日を過ごすだけで精一杯。 不安、戸惑い、居心地の悪さ。
5月	学校の雰囲気には少しずつ慣れた。 スクールカウンセラーとしてのアイデンティティを見出せずに不安。
6月	少しずつ相談が増え、居心地の悪さは軽減されていく。 孤独感を感じ始める。
7月	面接が継続してはいるようになり安心感がでてくる。その一方で、教職員に疑問を感じ始める。
8月	夏休みに入り校内研修はあるものの、学校という場と距離をおけエネルギーを補充できる。
9月	スクールカウンセラーとしてのアイデンティティを少しずつ見出し始める。 孤独感はまだ感じる。
10月	自分の中のスクールカウンセラーとしてのアイデンティティが少しずつはっきりしたものになっていく。

## 2. 西九州大学大学院臨床心理コースの卒後教育

### (1) 不安をうちあける相手としてのSV

A自身によるSC体験の振り返りにみるように、SCとして派遣された最初の2ヶ月(4月、5月)は、大きな不安、戸惑いがみられる。とくに評価される不安が強く、役にたたないと思われることへの緊張や防衛があったようである。また学校での体験をうまく明確化できず、SVの助言もかみあわないものを感じていたようであるが、とりあえずは不安をうちあける相手としてSVは存在していた。

### (2) 支える存在としてのSV

その後(6月、7月)、Aは学校の雰囲気に対し慣れてくる、それと同時にA自身の価値観と教職員の価値観の差異を感じ、対応に苦慮し始める。スーパービジョンにおいても学校での出来事を脚色して報告しているのではないかとの思いが強くなっている。SVは、Aの活動は心理臨床的アプローチとして方向を誤っていないことを保障し、Aを支持した。さらに数ヶ月を過ごし(8月、9月、10月)教職員との人間関係、また守秘義務と連携との葛藤を経験するなかで、AはSCとしてのアイデンティティ(Identity)を少しずつ見出していった。

### (3) 体験の明確化のためのケースカンファレンス

AはSC活動を開始してからおよそ半年の間に、2度ケースカンファレンスで報告している。1回目は、漠然とした問題提起であった。A自身が振り返っているように自信のなさが前面にでて、Aにとってカンファレンスが有益であったのかどうか危惧される面もあった。しかし、この危惧は2度目のカンファレンスによって払拭された。Aは次のように述べている。「——学校で自分がどのように動いていけばいいのか、どの部分が足りなかったのかということ进行讨论しているうちに自然と気付け、SCとして働く意欲をもらったように思う。」

個別事例への対応をディスカッションするわけではない場合、どの体験に焦点づけるか、カンファレンスに出す前には本人自身が明確化できていないことが多々ある。カンファレンスの中でこそ、自分が何を困っているのか、どのように感じているのかが明確化することができるのである。

以上、本論では修了生Aの具体的な事例を通して、西九州大学大学院の卒後教育としてのスーパービジョン、修了生を交えた拡大ケースカンファレンスが、(1)心理臨床体験の「不安を打ち明ける場」、(2)「支えてもらえる場」、(3)「問題を明確化する場」とし

て機能したことが示唆された。

## 文 献

- 1) 村山正治 (1995) : スクールカウンセラーの新しい時代の幕開け. 村山正治・山本和郎編 : スクールカウンセラー—その理論と展望. ミネルヴァ書房, 263-274.
- 2) 黒沢幸子 (2000) : スクールカウンセリング活動の5本柱—学校現場に「サービス」と「コミュニティ」の視点を持ち込み、「未来」を創る. 村山正治編 : 臨床心理士によるスクール・カウンセラー. 現代のエスプリ 別冊, 至文堂, 89-99.
- 3) 徳田仁子 (2000) : スクールカウンセリングにおける統合的アプローチ. 心理臨床学研究, 18(2), 117-128
- 4) 田嶋誠一 (2001) : 相談意欲のない不登校・ひきこもりとの「つきあい方」. 臨床心理学, 3, 333-344.
- 5) 伊藤美奈子・平野直巳編 (2003) : 学校臨床心理学・入門—スクールカウンセラーによる実践の知恵. 有斐閣.